

構成領域に着目した住空間の変化に関する研究
 ~2000年以降の『新建築 住宅特集』掲載作品を対象として~
Research on changes in living space focusing on constituent areas
 ~For works published in "Jutakutokushu" after 2000~

○布川茉奈¹, 山中新太郎²

*Mana Nunokawa¹, Shintaro Yamanaka²

This is a study of the composition of dwelling spaces. Due to the fact that the modern family has evolved in recent years, the LDK-style home is no longer suitable.

This study aims to clarify the trends of changes to be analyzed floor plans made for homes after the year 2000, based on previous studies, and to be used for the future development of dwelling spaces.

1. はじめに

1-1. 研究背景

現在の住居は「夫婦と子からなる子育て期の核家族」という生活スタイルを想定した nLDK という居住形式が主流となっている。しかし一方で近年少子高齢化、女性の社会進出、産業構造の変化により、晩婚化、非婚化、非血縁者同士が集まって暮らすといった、生活スタイルの多様化が表れてきている。2015年に行われた国勢調査で最も多かった「夫婦と子からなる核家族」1,428万8千世帯も人口問題研究所の予測^{注1)}では、1985年をピークに2040年には、1,182万世帯まで減少すると予測されている。

生活スタイルの多様化や単身化が進むとされる未来で、nLDK という居住形式はこれからの我々の生活像に対し適したものであるのだろうか。

1-2. 研究の位置づけと目的

2004年に大橋ら²⁾は、「これからの多様な家族の生活スタイルに対応し、自立した生活や子育て環境を生み出す居住ネットワークの形成^{注2)}のための、柔軟で開かれた共用空間をもつ住空間構成」の類型化を行い、個人の居住ネットワークの形成のために最適な空間構成モデルを抽出した。

本研究では2000年から20年間の住宅の間取り構成を分析し、生活スタイルの多様化による住空間の変化の動向を明らかにすることを目的とする。

2. 分析方法

2-1. 分析対象

2000年から2020年の『新建築 住宅特集』20年分から各年1冊を選定した。選定基準としては、間取りの構成や家族構成との関係性を連想させる特集またはテーマの無い作品集を選定した。またリノベーション、

別荘といった、あきらかに本研究の目的から離れたテーマは除外した。

2-2. 分析

生活空間などを取り扱う既往研究では、個人の領域と家族の領域の区別がなく、個人というものが家族の一員であるという認識であることが多い。本研究では個人の領域とは家族から独立した最小単位として扱う事とする。

2-2-1. 居住空間の構成領域

居住空間は既往研究¹⁾に基づき4つの構成領域に分類した。(表-1)

表-1 居住空間の構成領域

構成領域		
Pe	Personal Territory	個人が占有する領域
CC	Closed Common	同居者が共有する領域
OC	Open Common	同居者以外の人も利用可能な共有領域
Pu	Public Territory	生活圏である地域社会

① Personal Territory (Pe)

着替えや就寝といった個人が占有して行う用途であり、その領域に対し特定の人が思われる領域。

② Closed Common (CC)

居住者である個人の集合体のみが使用できる領域。例としてリビング、ダイニング、キッチンといった領域がある。

③ Open Common (OC)

居住者に限らず、外部の個人も利用可能な領域。地域に開かれたリビング、ダイニング、中庭や土間といった領域である。

④ Public Territory (Pu)

公共領域のことであり、全ての個人が利用可能である。

なおこの構成領域は、室名から想定される用途にあてはめるのではなく、対象書籍の説明から判断できるものには、それに適した構成領域を与える。

2-2-2. 構成領域の組み合わせによる類型 (表-2)

家族の生活スタイルは既往研究¹⁾に基づき、保有する構成領域の違いによって4つのタイプに類型され以下の名称とする。

[I] 依存型 構成領域はPe, Puの2つである。人が集うことを想定した空間はなく、家族機能^{注3)}の一部を外部社会に依存するタイプである。

[II] 自足型 構成領域はPe, CC, Puの3つである。nLDKの住宅がこのタイプに当てはまる。家族機能が居住者で完結している。

[III] 共用型 構成領域はPe, OC, Puの3つである。自足型とは違い家族機能は完結していないが、補完するために外部社会を受け入れる空間が住居内に設けられている。

[IV] 適応型 構成領域はPe, CC, OC, Puの4つである。家族機能は居住者で完結しているが、外部社会を受け入れる空間も設けることで、状況に応じて家族機能を外部から補完するかするかしないか選択できる。

表-2 構成領域のタイプによる類型

家族機能の担い方	構成領域の種類			
	Personal Territory (Pe)	Closed Common (CC)	Open common (OC)	Public Territory (Pu)
[I] 依存型	○			○
[II] 自足型	○	○		○
[III] 共用型	○		○	○
[IV] 適応型	○	○	○	○

2-2.3 タイプの判定

2-2-1, 2-2-2 を用いて『新建築 住宅特集』に掲載される作品の平面図からタイプの判定を行った。(図-1)

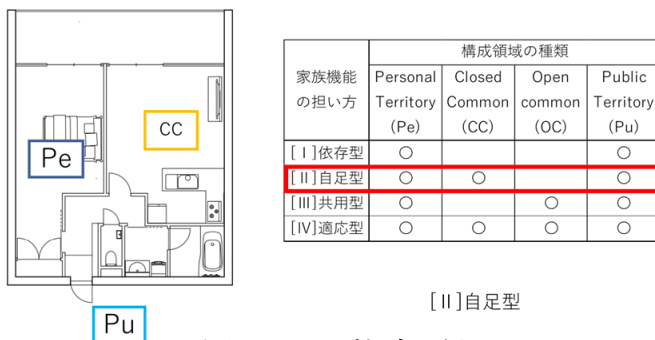


図-1 タイプ判定の例

3. 分析結果

結果は(図-2)のようになった。2000年では自足型が100%(n=13)、その後2010年までは自足型の割合が多く占めているが、2011年に適応型20%、自足型80%(n=10)となり、それ以降適応型の出現が毎年見られるようになった。2020年では適応型33%、自足型67%(n=15)で適応型の割合は増えていることがわかる。

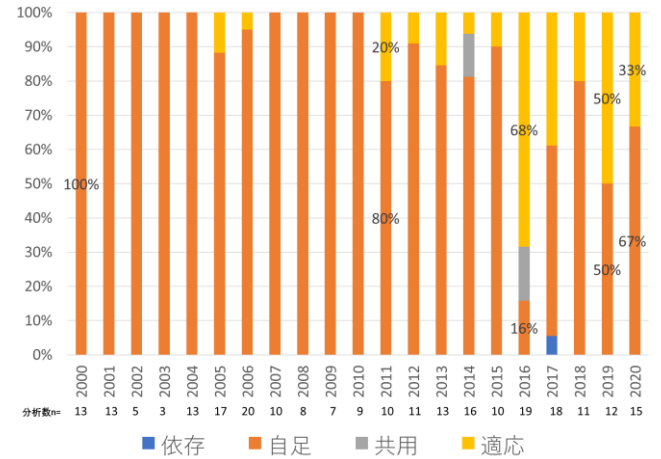


図-2 各年のタイプの割合

4. まとめと展望

「夫婦と子からなる子育て期の核家族」という生活スタイルを想定したnLDKという居住形式は、社会変化に伴い新たな居住形式に発展していくと予想される。しかしnLDKという居住形式はまだ根強いものである。今後は2020年以降にどのような居住形式が適しているのか明らかにしていきたい。

注

- 注1) 人口問題研究所の平成30年2月の推計による <http://www.ipss.go.jp/>, 令和2年10月20日閲覧
- 注2) 居住区域内で個人を核とした、友人や近隣の人、外部サービスや個人との関係を、必要に応じて選択することができる環境のことをいう。
- 注3) 家事、介護、育児など。

参考文献

- 1) 大橋寿美子, 小谷部育子, 篠原聡子, 小泉雅生, 高橋鷹志「オープン・コモンをもつ住空間の構成モデルの考察」日本建築学会計画論文集 第577号, pp.17-24, 2004年3月
- 2) 大橋寿美子, 高橋鷹志, 「これからの家族と住宅の移行-住宅提案にみられる生活・空間類型の分析から-」日本建築学会技術報告集 第8号, pp.163-168, 1999年6月
- 3) 大橋寿美子, 小谷部育子, 高橋鷹志, 「生活行動の実態からみたオープン・コモンの働きと適応性に関する考察」日本建築学会系論文集 第587号, pp.25-32, 2005年1月